

# 長岡京跡右京第 751次 発掘調査報告



2003

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



( 1 ) J R 長岡京駅から西山遠景 ( 東から )



( 2 ) 調査地周辺 ( 西から )



(1) 南調査区全景(北から)



(2) 北調査区全景(南から)

## 序 文

平成10年度から開始された長岡京駅西口地区第一種市街地再開発事業も本年度で4年目となりました。この地区は長岡京跡右京六条一坊という長岡京域のほぼ中央部にあたるとともに、近世勝龍寺城跡や神足遺跡の西半部にも該当する場所で、新しい都市づくりへの期待と同時に、都城や城館、集落遺跡というかつての都市づくりの解明という意味でも成果が期待されるところです。

ここに報告する調査は、市街地再開発に伴って道路を拡幅するという、長岡京駅前線整備事業に関する埋蔵文化財発掘調査です。この道路はJR長岡京駅から長岡天満宮に向かう東西方向の道路で、当市の幹線道路の一つとなっています。市街地のため、複数次に分割した調査がこれまで継続されており、すでに長岡京市埋蔵文化財報告書第16・24・28集として報告されています。

これらの調査成果を有効に活用し、道路周辺部の成果と合わせて、長岡京跡をはじめとする市街地内の遺跡の解明に努力しているところです。

最後になりましたが、調査の実施・整理にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後もなお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年2月

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長 芦田 富男

## 凡 例

1. 本書は、長岡京市開田二丁目において、2002(平成14)年10月2日から1月2日まで実施した長岡京跡右京第75次調査の調査報告書である。
2. 調査は、長岡京駅西口地区第一種市街地再開発事業の長岡京駅前線埋蔵文化財発掘調査(A18)として長岡京駅西口地区市街地再開発組合の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したものである。現地調査は、同センター調査係主査中島皆夫が担当した。
3. 調査対象となった遺跡は、長岡京跡右京六条一坊十四町、開田遺跡、神足遺跡である。
4. 本調査の正式名称は、長岡京跡右京第75次(7ANKSM-10地区)調査である。長岡京跡の調査次数は右京域での通算調査件数を示す。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の分類表示、後半が高橋美久二「長岡京跡昭和5年度発掘調査概要」『京都府概報』(197年)の旧字名による地区割りと地区内での調査回数を意味する。KSMは開田小字下ノ町の地区名略表記である。
5. 本書で使用した長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第3巻第4号(199年)の復原案に従った。また、地形区分については、基本的に「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一(199年)によっている。
6. 本書では国土座標旧座標系の第 系を使用した。
7. 本書挿図の土層名で< >を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』(199年版)のJIS表記法による土色である。
8. 本文の(注)に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集(198年)に従って略記した。
9. 遺物写真は中島、小田桐淳が撮影を行った。
10. 本書は中島が執筆および編集を担当した。

本書表紙のカットは柱穴P4出土の炉壁



## 本文目次

序文	-----	i
凡例	-----	ii
1 はじめに	-----	1
2 調査経過	-----	1
3 検出遺構	-----	2
(1) 近世の遺構	-----	4
(2) 中世の遺構	-----	4
(3) 長岡京期以前の遺構	-----	5
(4) 時期不明の遺構	-----	6
4 出土遺物	-----	7
5 まとめ	-----	8
(1) 長岡京期	-----	9
(2) 中世	-----	9

## 図 版 目 次

巻頭図版 1 ( 1 ) J R 長岡京駅から西山遠景 ( 東から )

( 2 ) 調査地周辺 ( 西から )

巻頭図版 2 ( 1 ) 南調査区全景 ( 北から )

( 2 ) 北調査区全景 ( 南から )

図版 1 ( 1 ) 南調査区中近世遺構 ( 北から )

( 2 ) 南調査区完掘状況 ( 北から )

図版 2 ( 1 ) 北調査区中近世遺構 ( 南から )

( 2 ) 北調査区完掘状況 ( 北西から )

図版 3 ( 1 ) 溝 S D 01 ( 南から )

( 2 ) 柵 S A 11・ 12 ( 西から )

( 3 ) 土坑 S K 10 ( 北から )

( 4 ) 土坑 S K 08 ( 南東から )

( 5 ) 溝 S D 07 ( 西から )

( 6 ) 土坑 S K 13 ( 南から )

図版 4 ( 1 ) 南調査区溝 S D 03 ( 北西から )

( 2 ) 北調査区溝 S D 03 ( 北西から )

( 3 ) 出土遺物



## 挿 図 目 次

第1図	長岡京と調査地の位置(1/40000)	-----	五
第2図	発掘調査地位置図(1/5000)	-----	1
第3図	調査前風景(北から)	-----	2
第4図	北調査区作業風景(南東から)	-----	2
第5図	検出遺構図・土層図(1/100)	-----	3
第6図	槽S A 1実測図(1/50)	-----	4
第7図	槽S A 1柱穴P 2(南から)	-----	4
第8図	槽S A 12実測図(1/50)	-----	4
第9図	槽S A 12柱穴P 3(北から)	-----	4
第10図	土坑S K 10実測図(1/50)	-----	4
第11図	土坑S K 08実測図(1/50)	-----	4
第12図	土坑S K 09実測図(1/50)	-----	5
第13図	土坑S K 11実測図(1/50)	-----	5
第14図	土坑S K 13(南から)	-----	5
第15図	溝S D 03(1/100・1/50)	-----	6
第16図	溝S D 03断面A・C-E(南東から)	-----	6
第17図	土坑S K 02実測図(1/50)	-----	6
第18図	出土遺物実測図(1/4・1/2)	-----	7
第19図	調査地周辺の長岡京期検出遺構図(1/2000)	-----	8

## 付 表 目 次

付表 - 1	周辺地域の中世調査成果一覧表	-----	9
付表 - 2	報告書抄録	-----	10

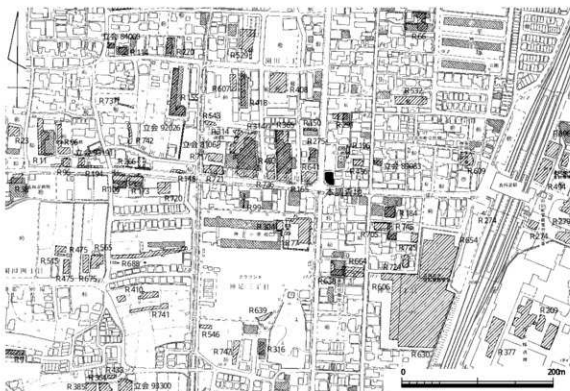
## 1 はじめに

本調査は長岡京駅西口地区市街地再開発組合の長岡京駅前線埋蔵文化財発掘調査（A 18）として実施した。調査地はJR長岡京駅の西約250mの長岡京市開田二丁目地内に位置し、調査は府道御陵山崎線と市道長岡京駅前線の交差点北東角地における道路拡幅工事に伴うものである。

周辺の自然地形は安定した低位段丘に分類され、付近は北から南へ緩やかに傾斜している。調査地は長岡京跡右京六条一坊十四町の北西部にあたり、右京第36次調査の成果から北約20mに六条条間小路南側溝、西約30mに西一坊大路東側溝が想定される。右京六条一坊十四町については、右京第60次調査<sup>(3)</sup>などで確認された大規模な掘立柱建物群が四町域を占有する場合、その北西町に相当することが指摘された<sup>(4)</sup>。また、府道を挟んで実施された右京第64次調査<sup>(5)</sup>では長岡京期の溝状土坑が検出されており、同調査および四町域の周辺部で実施された数回の調査から、この四町域の周囲に大規模な溝が巡る可能性も指摘されている<sup>(6)</sup>。しかし、当地は溝推定位置のやや南にあたり、残念ながら溝の有無を確認することはできなかった。調査地は神足遺跡と開田遺跡の推定範囲が重複する場所にも相当する。しかし、周辺で実施された調査では長岡京期以外の目立った成果が少ないため、神足遺跡、開田遺跡の周辺地域の様相は明らかになっていない。

## 2 調査経過

調査では区域内に重機掘削で除去した盛土、人力によるあげ土の仮置き場所を確保する必要があった。また、調査対象地の面積が狭小であったため、調査は対象地内を南北2つの調査区に分



第2図 発掘調査地位置図（1/500）

## 2 検出遺構

割り順に行っている。10月2日から南半部の調査作業に着手し、この部分での掘削・記録作業が終了した10月30日から、南半部の埋め戻しと北半部の重機掘削を行った。北半部の掘削・記録作業が終了し、機材撤去など復旧作業の全てが完了したのは1月2日であった。

なお、南北調査区の重複を除いた総調査面積は160㎡を測り、調査区の中心は第一座標系の $Y = -27321$   $X = -119718$ に位置していた。

## 3 検出遺構

基本層序(第5図) 調査地は再開発事業が始まるまで屋敷地であったため、全域に厚さ0.3m前後の盛土が施されている。しかし、194年米軍撮影の航空写真からは当地が畑地であったことが窺え、この盛土が戦後に施されたものであることが分かる。現地表面(盛土上面)の標高は調査区北端で18m、南端が18.7mを測る。盛土の下には藪土状の黄灰褐色土が2層(第3・6層)あり、それぞれ厚さ0.2m前後を測る。第6層から掘り込まれた攪乱坑の中からは、寛永通寶と考えられる銭貨が出土しており、黄灰褐色土が形成された時期の一端を窺うことができた。第6層の下には厚さ0.1~0.2mの黒灰褐色土(第9層)が認められる。第9層の分布は一様でなく、調査区西半部は東半部に比較して薄く、確認できない範囲もあった。第9層を完全に除去した段階で地山面が現れる。地山は黄褐色粘質土を主体としているが、調査区の南西隅では茶褐色粘質土、茶褐色砂礫土などが認められた。地山面の標高は調査区北端が18.2m、南端で18.1mを測り、北西から南東方向へ緩やかに傾斜していた。

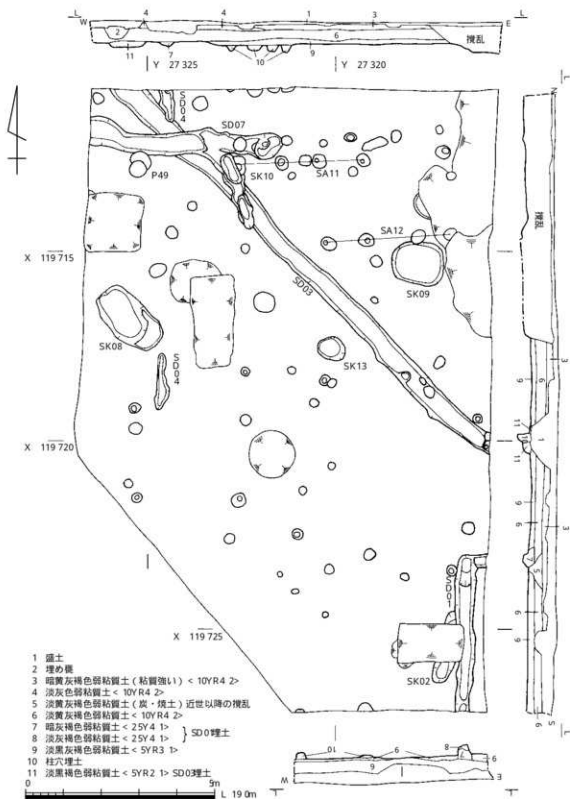
調査で確認したのは溝4条、土坑5基、柵2条の他、並びの明らかでない柱穴が6基を数えた。所属時期には近世、中世、長岡京期、古墳時代以前のものがある。



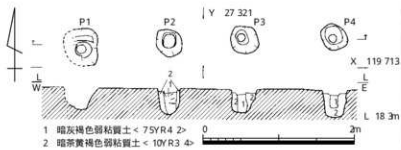
第3図 調査前風景(北から)



第4図 北調査区作業風景(南東から)



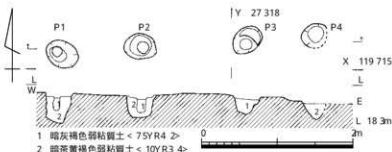
第5図 検出遺構図・土層図 (1/100)



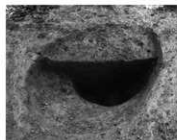
第6図 柵SA 11P 2(南から)



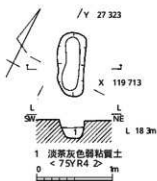
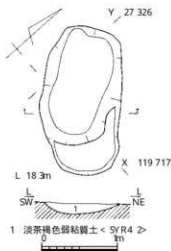
第7図 柵SA 11P 2(南から)



第8図 柵SA 12P 3(北から)



第9図 柵SA 12P 3(北から)

第10図 土坑SK 10実測図  
(150)第11図 土坑SK 09実測図  
(150)

## (1) 近世の遺構

溝SD 01(第5図) 調査区の南東隅で確認した幅約0.4mの溝で、調査区南辺から約4m北の位置で東へ直角に折れ曲がる。深さは0.15~0.3mを測り、南側に向かって深く掘削されている。灰色系の埋土からは土師器、近世陶器、中世銭貨が出土した。

溝SD 04(第5図) 調査区西側の北辺と中央部で、幅0.1m程度の小規模な南北溝を確認した。北辺と中央部の間は失われているが、本来一連の溝であったと考えられる。また、中央部より南では溝の痕跡を確認できなかった。遺物は出土していないが、埋土は溝SD 01と同様な灰色系の埋土を呈している。

柱穴(第5図) 溝SD 01・04と同様な灰色系の埋土を有する柱穴を2基確認したが、埋土に遺物は含まれていなかった。

## (2) 中世の遺構

柵SA 11(第6・7図) 調査区北辺で確認した4基の柱穴で構成される。柵は東西方向を指向するが、東に対して北へ5°振っていた。柱間は3間であり、その間隔は西から1.1m、1m、1.2mを測る。各柱掘形は直径0.3m程度の不整形円で、深さが0.35m前後を測る。また、各柱穴とも直径0.15m程度の柱抜き取り痕跡が認められた。柵SA 11の柱穴P 2では柱抜き取り穴から土師器、瓦器碗が出土している。柱穴P 1は後述の土坑SK 10と重複しており、より古い段階であることが分る。

柵 S A 12(第 8・9 図) 柵 S A 1は前述した柵 S A 11の南 22m にあり、その方向は柵 S A 11に一致していた。柵 S A 12の柱間は 3間であり、その間隔は西から 1m、13m を測る。各柱掘形は直径 0.4m 程度の不整形円で、深さが 0.3-0.4m を測る。柱穴 P 1・2 には直径 0.15m 程度の柱抜き取り痕跡が認められた。柵 S A 1と並行することからほぼ同時期のものと考えられる。

溝 S D 07(第 5 図) 調査区の北西部で検出した東西溝であるが、輪郭は比較的不明瞭で直線的ではない。また、西壁から約 4 m の位置で南方へ延びる溝に分岐している。溝の規模は幅 0.4-0.8m で深さ 0.15m 前後を測り、底部は西から東へ緩やかに傾斜している。溝埋土は茶灰色系を呈し、僅かに土師器片が含まれていた。

土坑 S K 08(第 1 図) 調査区西辺で確認した楕円形を呈する土坑で、主軸は北に対して 45 西に振る。土坑は平面規模に対して浅いもので、主軸方向の長さ約 2 m、幅約 1m、深さ 0.1m 前後を測る。土坑埋土は茶褐色を呈しており、土師器、瓦器の細片が出土している。

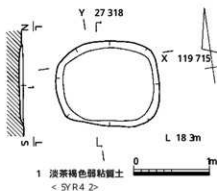
土坑 S K 09(第 12 図) 調査区北東部で確認した円形に近い形状の土坑であり、ほぼ東西方向の長軸 1.4m、幅 1.1m で、深さは 0.1m に満たない。土師器、瓦質土器の羽釜が出土している。

土坑 S K 10(第 10 図) 溝 S D 07の南方に分岐する溝と重複して確認した土坑で、溝 S D 07より古い時代の遺構である。土坑の平面形態は細長い楕円形を呈し、主軸が北に対して 25 西へ振っている。主軸方向の長さ 0.8m、幅 0.4m で、深さは 0.25m 前後を測る。土坑埋土からは土師器、瓦器の細片が出土している。

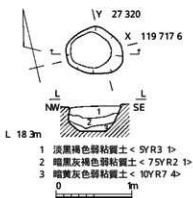
柱穴(第 5 図) 茶灰色ないし茶褐色系の埋土を持つ柱穴を中世のものとした。柱穴は調査区の北半部を中心に 5 基を確認しているが、建物や柵として把握できるものはない。

### (3) 長岡京期以前の遺構

土坑 S K 13(第 13・14 図) 調査区のほぼ中央部で確認した楕円形を呈する土坑である。土坑の主軸は北に対して 60 西へ振る方向で、主軸方向の長さ 0.8m、幅 0.6m で深さ 0.3m を測る。埋土の最上層はよく締まった性質で、色調は黒褐色を呈していた。土坑からは土師器杯 B、須恵器杯 A など長岡京期の土器が出土している。



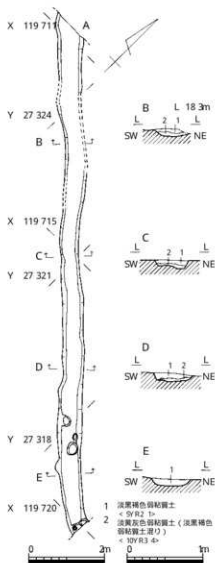
第 12 図 土坑 S K 08 実測図 (1.50)



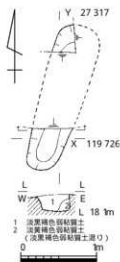
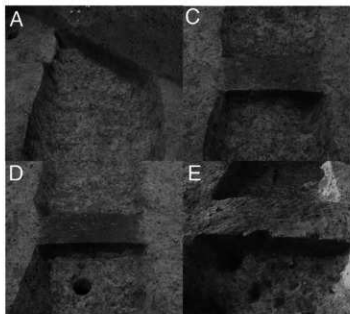
第 13 図 土坑 S K 13 実測図 (1.50)



第 14 図 土坑 S K 13(南から)



第10図 溝S D 03(1/100・1/50)

第11図 土坑S K 02  
実測図(1/50)

第12図 溝S D 03断面A・C-E(南東から)

溝S D 03(第15・16図) 溝S D 03は調査区の北半部に北西から南東方向に横切る斜行溝で、調査では約14mにわたって確認することができた。溝の方位は北に対して45°西へ振っており、溝の規模は幅0.5~0.7m、深さ0.1~0.2mを測る。埋土の最上層は長岡京期の土坑S K 13最上層と同じ黒褐色土であるが、土坑S K 13に比べて粘性が弱く締まりの悪い土質であった。黒褐色土を埋土とする遺構は、土坑S K 13の他には柱穴敷基があるだけで、溝S D 03に関連する遺構は検出できなかった。また、溝S D 03の埋土には少量の土師器片が含まれていただけで、溝の詳細な時期も明らかでない。しかし、中世、近世の溝や柱穴との重複関係から、より古い段階の遺構と判断できる。

柱穴(第5図) 土坑S K 13 溝S D 03と同様な黒褐色系の埋土を持つ柱穴を長岡京期以前と推定した。しかし、中世の柱穴と同様、出土遺物がほとんど認められないため柱穴の時期は確定できない。柱穴は調査区の南半部を中心に10基を確認しているが、建物や柵として把握できるものはない。

#### (4) 時期不明の遺構

土坑S K 02(第17図) 攪乱坑と溝S D 01によって遺構の輪郭が失われているが、長軸2m程度で長方形を呈する土坑と考えられる。土坑の主軸は北に対して15°東へ振っており、幅0.5m、深さ0.3m程度を測る。出土遺物がほとんど無く、類似する埋土の遺構も認められないため、土坑の時期を推測できなかった。

## 4 出土遺物

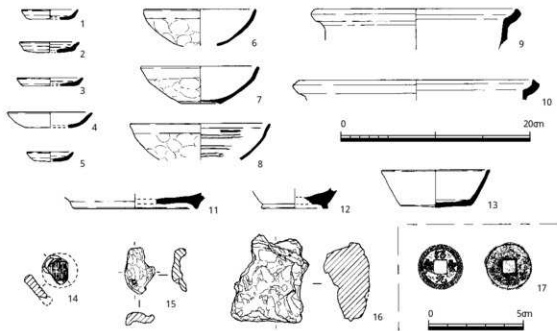
本調査では整理箱にして1箱の遺物が出土した。出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、土製品、炉壁、中近世銭貨があり、時期的には近世、中世、長岡京期のものが認められた。主な出土遺物を第18図に示したが、その数は限られている。

## (1) 近世の遺物

近世の特徴的な遺物には攪乱坑や第6層から出土した泥面子(14)、伏見人形(15)、寛永通寶がある。泥面子は直径3&#x8mを測り、表面に印章状の文字を陽刻する。伏見人形は種類が明らかでない破片で、深さ0.5m程度の刺突が認められる。溝S D 0からは土師器、唐津焼の小片が出土しているが、総じて遺構には遺物が含まれていなかった。

## (2) 中世の遺物

土師器(1~5)、瓦器(6~10)、炉壁(16)、中世銭貨(17)の他に須恵器、陶磁器がある。量的な多少はあるが、中世の櫛、土坑、溝からは遺物が出土しており、遺構の分布とともに本調査において最も目立った時期といえる。櫛S A 1柱穴P 2の柱抜き取り穴からは土師器皿(1~4)、瓦器椀(6~8)が出土している。土師器皿には口径6~7cmの1~3、一回り大きく口径が約9cmの4がある。瓦器椀は口径12~15.5mを測り、いずれも焼き締まりの悪いものであった。7はほぼ完全な形に復元できる個体で、口径12.6mで器高3.9mを測り、底部には不明瞭な高台が貼り付けられる。その他の遺構では、土坑S K 09から土師器小皿(5)と瓦器鍋(10)、溝S D 07でも瓦器鍋(9)が出土した。16の炉壁は調査区北西の柱穴P 49から出土した。長さ9cm程度の断片であり、内面の融着物から鉄製品に関連する炉壁と考えられる。また、側面には部分的に整っ



第18図 出土遺物実測図(14・12)



た面が認められるが、この面は炉構築過程の粘土帯積み上げ痕跡を示すものと考えられる。17の  
中世銭貨は近世の溝S D 0から出土した。北宋銭の紹聖元寶で109年の初鋳である。

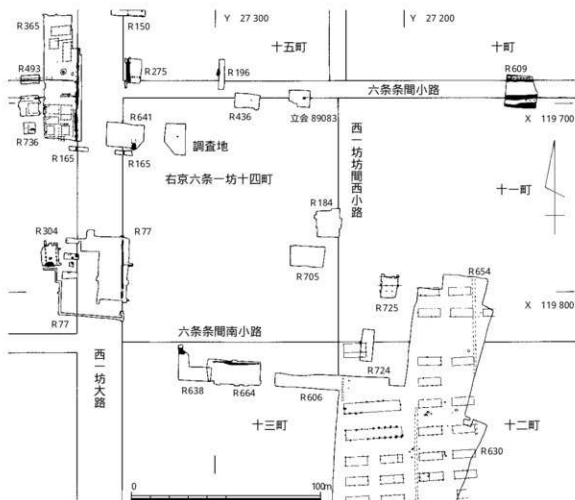
### (3) 長岡京期の遺物

長岡京期の遺物には土坑S K 13から出土した土師器(11)、須恵器(13)と、第9層の須恵器  
(12)がある。11は土師器杯Bと考えられるもので、高台径が134mを測る。13の須恵器杯Aは口  
縁部が直線的に外傾する形態で、口径116m、器高39mを測る。12は須恵器壺Mと考えられる破片  
であり、高台径が69mを測る。

長岡京期以前と考えた斜行溝S D 0からは土師器が少量出土しているが、いずれも小片で時期  
的な特徴を窺えない破片であった。

## 5 まとめ

本調査では中世の遺構、遺物が確認されたが、期待されていた長岡京跡や弥生時代・古墳時代  
の開田・神足遺跡に関わる調査成果は少なかった。しかし、中世の土坑、柵を検出できたことで、  
中世開田・神足遺跡の範囲や両集落の関わりを検討するための資料が得られたと言える。



第19図 調査地周辺の長岡京期検出遺構図(1/2000)



様相などは明らかでない。本調査で出土した炉壁片についても、今後調査成果の蓄積によってその評価を定めることができるだろう。一方、北西区域と南西区域の西側は中世の遺構がほとんど確認できない範囲である。この範囲のさらに西には犬川が南北に流れており、中世開田集落と神足集落の境界を想定できる。ただし、この範囲をより正しく評価するためには、犬川の整備時期や河川の氾濫による影響を詳しく解明する必要がある。

- 注1) 日下雅義・植村善博「長岡京地域地形分類図」『長岡京市史』資料編一 1991年  
 2) 小田桐 淳他『長岡京跡右京六条二坊二町・三町の調査』『長岡京市センター報告書』第10巻 1997年  
 3) 岩崎 誠『長岡京跡右京第606次・神足遺跡発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第14巻 1999年  
 4) 岩崎 誠・木村泰彦他『長岡京市センター報告書』第2巻 2002年  
 5) 小畑佳子『長岡京跡右京第641次・開田遺跡発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第16巻 1999年  
 6) 木村泰彦『長岡京期の遺構 小結』『長岡京市センター報告書』第26巻 2007年  
 7) 岩崎 誠『長岡京市センター報告書』第29巻 2003年

付表 - 2 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい75じはくつちょうさほうこく
書名	長岡京跡右京第75次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	中島 啓夫
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡(右京第75次) 開田遺跡 神足遺跡	長岡京市開田 二丁目地内	26209	107 080 083	34度59分 13秒	135度42分 03秒	20021022 ～ 20021125	160㎡	市道拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡(右京第75次)	都城跡	長岡京期	土坑	土師器、須恵器	
開田遺跡・神足遺跡	集落跡	鎌倉一室町時代 江戸時代 時期不明	溝・溝・土坑 溝 溝・土坑	土師器、瓦器、炉壁 土師器、陶磁器	

# 圖 版



(1) 南調査区中近世遺構(北から)



(2) 南調査区完掘状況(北から)

長岡京跡右京第75次調査

図版  
二



(1) 北調査区中近世遺構(南から)



(2) 北調査区完掘状況(北西から)



( 1 ) 溝SD 01(南から)



( 2 ) 槽SA 11・12(西から)



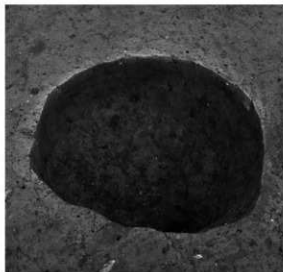
( 3 ) 土坑SK 10(北から)



( 4 ) 土坑SK 08(南東から)



( 5 ) 溝SD 07(西から)



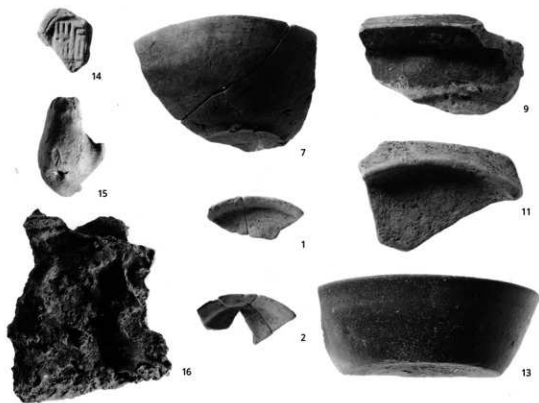
( 6 ) 土坑SK 13(南から)



( 1 ) 南調査区溝 S D 03( 北西から )



( 2 ) 北調査区溝 S D 03( 北西から )



( 3 ) 出土遺物



長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第30集

平成 15 2003年 2 月 27日 印刷

平成 15 2003年 2 月 28日 発行

編集発行 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター  
〒 617- 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10番地の 1  
電話 075- 955- 3622  
FAX 075- 951- 0427

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎  
〒 600- 8805 京都市下京区中堂寺鍵田町 2  
電話 075- 361- 9121代  
FAX 075- 371- 0666